

優秀賞

優しさに包まれて

鹿児島県 喜界中学校 三年

喜禎 あさひ

「お世話になりました。本当によくしてもらって、ありがとうございました。」

そう言って、祖母は何度も頭を下げた。

先週、入所していた老人ホームで、95歳になる曾祖父が亡くなった。その知らせはあまりにも突然で、私の頭の中は真っ白になった。曾祖父は、昨年末あたりから心臓が弱り、突然気を失うことがあったため、曾祖母といっしょに、看護が充実している老人ホームに入所していた。

といっても、おしゃべり好きで声も大きく、食欲旺盛な曾祖父は、とても生命力にあふれた人で、十代の頃、第二次世界大戦下で特攻隊に志願し、出撃三日前に終戦を迎えるという壮絶な経験を持つ。私は小さい頃から、平和であることのありがたさや、命の尊さを教えられてきた。

「あさひ、頑張れよ。負けるなよ。」

会う度に力強く話し、そして、私に会うこと、話をするのが何よりの楽しみだと、いつも言っていた。

老人ホームでは、コロナ対策のため、直接の面会ができなくなった。私は、扉越しの面会と、十日に一度、近況を知らせるはがきを送っていた。そして、私にとっては、二週間前の連休に会ったのが最後になった。

その日は、特別に部屋に入ることができ、ちょうど80才差の私たちは、

「5年後は、100才と20才のお祝いをいっしょにやろう。」と握手をして約束した。

もう少しの我慢。コロナが落ち着いたら、また、前のようにいつでも会えるようになる。そのときはそう信じきっていた。ショックだった。扉越しだと窮屈だったが、それでも顔を見せることはできたのに。後悔ばかりが私の頭の中を巡った。

そんな私に母が言った。

「おじいちゃんは、コロナの状況はわかっていたし、それに、見たでしょ。ホームの様子を。おじいちゃんは、ホームで気持ちよく過ごしていたんだよ。」

私は思い出した。特別に部屋に入れてもらったあの日。車いすのお年寄りに、床に膝をついて笑顔で話をする職員の方たちの姿を。曾祖父が少し動けば、それに合わせてケアをする様子を。また、面会に来ている私たちにも、スリッパの準備から扉の開け閉めまで、とても親切だった。

ホームからの帰り、家族で、

「すごいね。仕事とはいえ、なかなかあそこまではできないよね。相手に寄り添う優しさと、誰に対しても親切に接する姿は頭が下がるね。」

そう話したのを思い出した。そして、お通夜に駆けつけてくれたホームの方たちは、みんな、喪主席に車いすで座る曾祖母の手を握り、

「ばあちゃんは大丈夫？ご飯は食べられてる？」と、声をかけていた。その様子に胸が熱くなった。

私は考えている。人は寄り添いながら生きている。誰かに助けられ、励まされ、そしてまた、自分も誰かのために。人を大切に思う気持ちを行動で伝えられる、そんな人になりたい。そんな私を、曾祖父は、きっとずっと、どこかで見守っていてくれるだろう。